

ピートメリア®

ピートメリア®とは、天然軽石を母材に有機質土壌改良を混合した軽石系軽量人工土壌です。適度な保肥性・保水性・透水性を兼ね備えているため、樹木や芝生化等様々な緑化に対応する緑化基盤材です。

特徴

耐圧路盤……母材が硬質なため、高い支持力を保ちます。

軽量土壌……軽量なため、屋上など荷重制限のある場所に最適です。



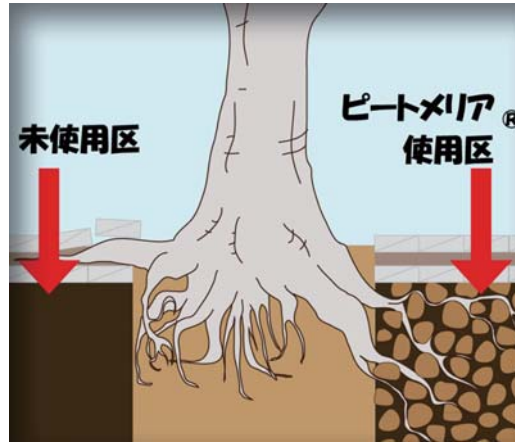
用途

芝生の床土(駐車場・多目的広場・校庭・園庭等)



耐圧性や根系域の空間が必要とされる芝生駐車場や、臨時駐車場として活用する校庭等の芝生化に最適です。

樹木の床土(街路樹・公園植栽・屋上緑化等)



根系域の空間を確保できるため、街路樹等の根上がりを防止することができます。



株式会社ジャングリーシステム

〒105-0013 東京都港区浜松町1-2-12 F-1ビル 6階

TEL:03-5776-1451 FAX:03-3435-7075

E-MAIL:info@jgsc.com Web:http://jgsc.com

JGS

ニュース



謹賀新年

あけましておめでとうございます。
旧年中は格別のご厚情を賜り、誠にありがとうございました。
おかげさまで弊社は今年創業十九周年を迎えます。
「企業の努力だけでは力不足な状況に直面しています。」
あらゆる業種の企業が非常に厳しい状況に直面しています。
私たち社員「ともに、お客様に喜んで頂く」という基本に立ちかえり、
地道に、ひたすら、目の前のできることから取り組んで参りたいと
存じます。
本年も変わらぬお引き立ての程よろしくお願い申し上げます。
皆様のご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

代表取締役 蒲生幹雄



昨年は格別の御厚情を賜り、厚く御礼を申し上げます。

本年も社員一同、一生懸命頑張ってまいりますので、何卒昨年同様のご愛顧を賜りますよう、お願い申し上げます。

皆様のご健勝と貴社の益々のご発展を心よりお祈り致します。新年は1月5日から平常営業とさせていただきます。

平成27年 元旦

Interview

21世紀緑化研究会理事長
明治大学農学博士

興水 肇 教授



1.『平和な社会』～緑が私たちに与えてくれるもの～

山本「日本で都市緑化が浸透しない理由として『緑がなぜ私たちに必要なのか』が分からないということが、一つの原因となっていると思うのですが、都市緑化の目的や、緑の必要性について教えて頂けないでしょうか。」

興水教授「『平和な社会を作る』それが目的です。

世界中では20世紀は自然破壊による自然の終焉だとも言われています。そのため21世紀は環境の世紀、緑を大切にし、生態系について考えていかなくてははいけません。

今、中東に一番注目されているレバノンという国があるのですが、そこにレバノン杉という大きな杉があります。レバノン杉は粘り気があって船材に適し、古代から中世にかけて地中海の国々の戦争用の船として良い材料とされてきました。材質、香りも良く、家具にも活用されるほど非常に良い樹木だったため、現在は絶滅危惧種になってしまっています。レバノン杉はレバノンの国旗の絵にもなっているのを知っていますか。」

山本「あれがレバノン杉ですか!？」

興水教授「そうです。だからレバノンは、国旗になっているレバノン杉が無くなってはいけなと考え、絶滅危惧種に指定し、今度は一所懸命に増やしています。もちろん国の象徴なので緑を大事にするという役割もありますが、同時に争いを防ぐためでもあります。中東の国々は乾燥し、植物が育ちにくい、そうすると人々は殺伐とし始めるのです。

何故かという、人々の怒りを吸収してくれる樹木が無いために、怒りの矛先が武器を持って戦う方向に行くのです。すると、あの人々が憎らしい、あの民族が憎らしい、という恨みを根強く覚えてしまった結果、争いが絶えないのです。彼らにとって『この前戦ったこと』とは1000年も昔の事を指しているのです。

対して日本人は、怒りという感情は一瞬で、争う事をしなくなっています。それは緑が豊かで、雨も多く、それが結果的に怒りというエネルギーを鎮めて、流してくれる。怒りのエネルギーが緑が吸収してくれているのです。昔の事ほど水に流して忘れてしまう、そのような、心のゆとりが出来るのです。したがって、緑は『平和な社会を作る』ことに繋がるのです。」



レバノン国旗



2. 2020年東京オリンピック・パラリンピック『鮮麗された日本庭園』～緑を大切にする意識～

山本「景観を良くし、癒し効果もある緑化、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けての都市緑化が、今後ますます進んで行くようですね。様々なお話はありますが、まだ計画段階といったところ、日本はどのような緑化をしていくのか、どのようなものにしていくべきかというご意見があれば是非お伺いしたいです。」

興水教授「2020年東京オリンピック・パラリンピックの現在決まっているテーマは『コンパクト』です。無駄な経費をかけず、限られた空間に質の高い鮮麗された日本庭園のような緑化が求められています。しかし欧米と比べると温暖な気候の日本は、きめ細かい緑化をするには過酷な環境なのです。」

山本「そのためには何が必要なのでしょうか？」

興水教授「コンパクトで質の高い鮮麗された緑化が必要と言いましたが、反面それを維持するのはとても大変です。人口密度も高ければ、それだけ利用密度も高く、結局、緑と人間の戦いとなってしまいます。日本の多くの緑化は、維持管理で大抵は失敗しています。緑化の技術は20世紀にほとんど完成していましたが、それを維持する技術が残念ながらまだ遅れています。人間は利用したい、植物は生存したい、そこに人間の管理技術という知恵を入れて緑を維持する。それが出来たら日本の緑化は成功です!」

山本「緑化をする際、どうしても密度が高い日本とアジアは、密度の低い欧米に比べ、それだけ維持管理が難しいということですね」

興水教授「日本が東京オリンピック・パラリンピックで都市緑化を成功させれば、アジアの都市すべての参考にもなります。

でも実はすでに成功例として、シンガポールガーデンシティがあります。人口密度も高い街ですが、日本に比べ、かなり小さい都市国家なため、あまり知られていません。先々代のリー・クアンユー首相が、この街をガーデンシティにするのだと決め、国を挙げてガーデン造りをしてきました。そのため、国民の間にも緑を大事にするという考えが定着し、乱暴に踏み荒らすことはなくなっているそうです。そういう意味でシンガポールの国民は緑化への意識が非常に高いため、成功したのではないのでしょうか。

ですから東京オリンピック・パラリンピックが日本にとっていいチャンスだと思っています。国を挙げて『緑や環境を大事にしよう』と目標を立て、それに邁進し、自然に国民が『緑を大切にする』と思えるように持っていければ大成功です。」

3.『芝生を造る技術』～初期土壌構成の大切さ～

山本「意識が変わったとして、次は技術的にどうしたらよいかという疑問が湧くと思います。例えば『校庭緑化をします』という話が出た際に、どのような土壌、基盤を使えばよいのか、というところで悩むことが多いようですが、初期の土壌の構成は、やはり大事なことなのでしょうか。」

興水教授「おっしゃる通り、初期の土壌の構成は一番大事です。植物を選ぶよりも地拵えや、基盤整備に8割の時間をかける必要があります。よく『家庭で芝生を造ろう』という話がありますが、大抵はみんな焦って種を蒔いたり、ホームセンターで買ってきた芝生をすぐに置いたりして、失敗してしまっています。

僕はそういう方に必ず『あなたは8割地拵えに時間をかけられますか、我慢できますか?』と問いかけます。まずは土壌選び、植物にとって最適な環境を与えられる資材を正しくそろえます。それを決めたら、レーキかけ、レーキかけは縦横斜め、横から見て真っ平らになるまで丹念にやって、それから芝生を張りなさい、もしくは種を蒔きなさい。芝生を張ったら、葉の先しか見えないくらい目土をかけなさい。目地に隙間が空いてしまうと、そこから乾燥し枯れてしまう、雑草が生えてくる、ですから目地を埋めて、あとは水をやれば、自然着植、綺麗な芝生になるのです。そういう地拵え、基盤整備、花壇も樹木もそうです。土壌が一番大事。」

『興水教授が選ぶ、土壌の成功例』『21世紀緑化研究会としての今後の取り組み』は次号へ続く

株式会社ジャパングリーンシステムより

これまでJGSは、緑化土壌の大切さについて理解し、製品開発に取り組んでいましたが、興水教授のお言葉でよりいっそう、初期の土壌環境の大切さを認識いたしました。2020年東京オリンピック・パラリンピックに向け、さらに加速する都市緑化の土壌の礎として、皆様のお役に立てますよう日々努力し、情報提供をさせていただき所存でございます。